

多摩川におけるギンイチモンジセセリの
分布と生態

1985年

田中和良

日本大学豊山学園教諭

目 次

1. はじめに	1
2. 多摩川における分布	2
3. 台風による生息地の環境変化と発生に対する影響	5
4. 火入れと生息に対する影響	7
5. 周年経過	9
6. 季節型	10
7. 幼虫の日周行動	13
8. 吸 蜜	14
9. 吸排水行為	15
10. 蛹 化	17
11. おわりに	17
参考文献	18

1. はじめに

ギンイチモンジセセリ (*Leptaline unicolor*) は、その名の通り後翅裏面に一条の白色部を持つ小形のセセリチョウで(写真1)、北海道から九州までほとんどの県に分布しているが発生地は局地的でどこにもいる種ではない。国外では西シベリア・中国北部・アムール・旧満州・朝鮮半島等の極東アジアに分布しているが分布は不連続で遺存的性格が強い種と思われる。

北海道・東北・本州中部の山地などでは年一回6月～7月に春型が発生し、関東以西の低山地や平地では年2回、すなわち4月下旬～5月中旬に春型が発生し、7月中旬～8月上旬に裏面の銀状紋が薄い夏型が発生する。また、関東地方の平地や南九州などではさらに8月下旬～9月上旬にも夏型が発生し年3回の発生となる。

多摩川では上流部の秩父山地から中流部の世田谷区までに記録がある。筆者は主に調布市染地3丁目付近(図1)(以下調査地)において本種の生態を観察したので報告する。

なお本報告の一部(訪花・吸水・季節型)については、世田谷昆虫愛好会の会誌LEPTALINAに報告済みのものである。



写真1 ギンイチモンジセセリ春型

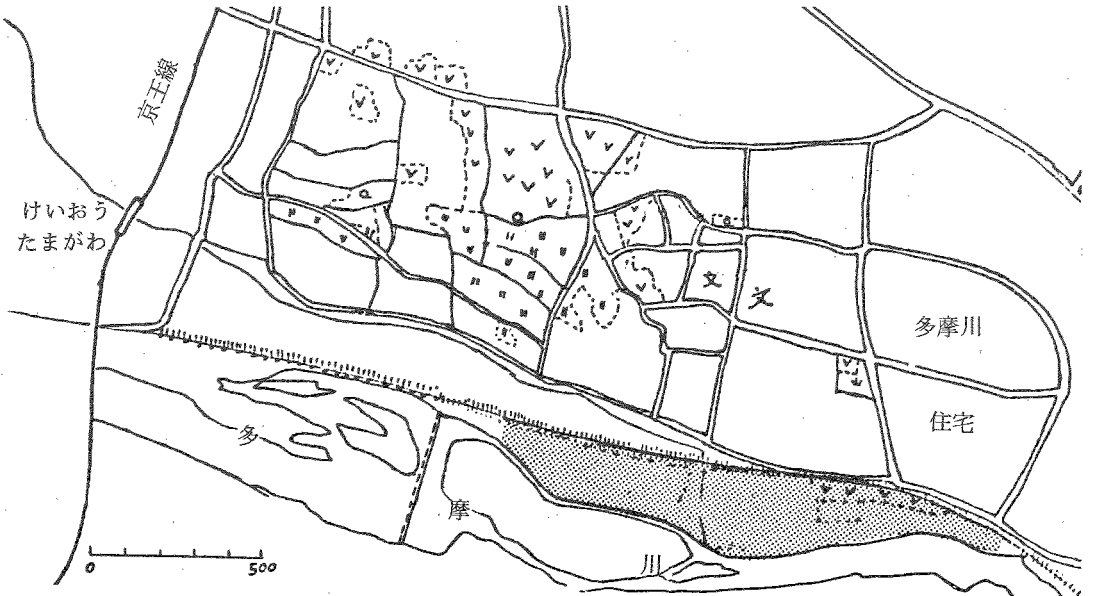


図1 調査地

2. 多摩川における分布

筆者の手にある文献から、過去に報告された多摩川流域での記録地点を拾い出してみると表1のようなものがある。これを地図上にプロットして見ると図2のようになる。一部原記載を見る事が出来ず記録年月日や採集者不明のものがある。また場所の確定の困難なものは省略した。この他にもまだ発表記録はあると思われる、御教示願えたら幸いである。なお、県名のないものはすべて東京都の地名である。

表1. 多摩川におけるギンイチモンジセセリの記録

記録地名	記録年/月/日	個体数	採集者	備考
山梨県 小菅村橋立 # 丹波山村雲取山	'78/5/28	3 exs	須走 重康	
西多摩町 六石山	'37/6/7			
青梅市 御岳山	'37/5/31			
青梅市 河辺	'72/6/21	3 exs	久保田 繁男	
" "	'72/6/22	2 exs	"	
" "	'72/6/27	3 exs	"	
" "	'75/7/25	1 目	"	
" "	'76/7/26	1 目	"	
" "	'73/7/27	1 目	"	
" "	'75/8/31	1 ex 1 目	"	
" "	'71/9/5	1 ex	"	
" "	'77/9/6	1 目	"	
" 新町			"	
" 厚沢	'76/5/8	2 ♂	星合 昭	
" 小曾木	'74/7/23	1 ex	前田 活郎	
日野出町 谷ノ入	'77/4/23	1 ex	宮野 浩二	
" "	'74/5/11	1 ex	"	
" 長井	'73/4/29	1 ex	"	
" 羽生	'64/7/19	1 ex	"	
" 北原	'72/9/3	1 ex	"	
羽村町 羽加美	'80/5/2	1 ex	倉地 正	
" "	'79/7/7	1 ex	"	
" "	'81/9/15	1 ex	"	
昭島市			遠藤 茂	
立川市砂川町6丁目	'82/7/22	1 ♀	松原 豊	
八王子市 野猿峠			鹿野 衡	
日野市 平山	'71/5/5	1 ex	田中 和良	未発表
多摩市 一の宮公園	'80/5/5	3 ♂ 1 ♀	松原 豊	
" 関戸	'28/7/15	多数	朝比奈正二郎	

記録地名	記録年/月/日	個体数	採集者	備考
多摩市 関戸	'82/4/24	7 ♂	福田 晴男	
" "	'82/9/22	1 ♀	松原 豊	
三鷹市 井ノ頭公園			渡正 監	
府中市 是政	'80/9/9	1 ♂ 1 ♀	岩野 秀俊	
" 押立5丁目	'81/5/5	1 ♀	松原 豊	
調布市 多摩川	'60/5/8	2 exs	豊島 弘三	
" "	'81/5/5	2 ♂ 2 ♀	松原 豊	
" 染地1丁目	'82/7/18	1 ex	田中 和良	未発表
" 染地2丁目	'82/7/18	1 ex	"	
" "	'76/8/31	1 ex	"	
" "	'76/9/1	1 ♂	"	
" 染地3丁目	'79/4/15	6 ♂ 目	"	
" "	'79/4/23	多数 ♂ 2 ♀	"	
" "	'79/7/6	1 ♀	"	
" "	'79/7/9	1 ♂	"	
" "	'79/8/17	1 ♂ 1 ♀	"	
" "	'79/9/2	5 ♂	"	
" "	'79/9/15	1 ♂ 8 幼	"	
" "	'80/4/27	7 ♂ 1 ♀	"	
" "	'80/4/28	多数 ♂ 2 ♀	"	
" "	'80/6/30	1 ♂	"	
" "	'80/9/2	5 ♂	"	
" "	'80/9/7	1 ♂	"	
" "	'81/4/29	1 ♂ 1 ♀	"	
" "	'81/5/3	1 ♂ 1 ♀	"	
" "	'81/9/15	1 ♂	"	
" "	'82/4/18	4 2 ♂ 目	"	
" "	'82/7/18	多数 ♂ 2 ♀	"	
" "	'82/9/3	2 ♀	"	
" "	'76/9/1	1 ♂	"	
" 入間町	'66/5/5	5 exs	小島 豊	
" "	'66/5/8	4 exs	"	
" "	'68/9/1		門馬 義行	
" "	'67/9/6		小島 豊	
狛江市 東野川	'67/8/20			
" 和泉多摩川	'68/9/1		本田・浜田	

記録地名	記録年/月/日	個体数	採集者	備考
狛江市 和泉多摩川			福田 晴男	
" 緒方	'68/9/1		本田・浜田	
" 元和泉3丁目	'68/9/1		"	
世田谷区成城4丁目	'68/7/13	1 ♀	門馬 義行	
" "	'79/8/15	3 ♂	福田 晴男	
" "	'79/8/17	3 ♂ 2 ♀ 9 egg	"	
" "	'80/7/4	4 ♂	木村 正明	
" "	'80/7/8	多数目	"	
" "	'80/8/24	2 exs	"	
" 成城	'77/5/8	1 ex 目	福田 晴男	
" "	'79/5/3	1 ♀	"	
" "	'79/8/17	3 ♂ 2 ♀	"	
" "	'79/9/9	1 ♂	"	
" "	'80/5/1	5 ♂ 1 ♀	"	
" "	'80/5/4	1 ♂	"	
" "	'80/6/28	1 ♂	"	
" "	'80/7/5	5 ♂ 1 ♀	"	
" "	'80/7/6	1 ♂	"	
" "	'80/7/19	1 ♂	"	
" "	'80/8/24	1 ♂	"	
" "	'80/9/2	2 ♂ 1 ♀	"	
" 多摩川	'79/8/17	1 ♂ 2 ♀	"	
" 喜多見9丁目	'67/8/20	1 ♂	小島 豊	
" "	'79/5/5	2 ♀	松原 豊	
" "	'79/8/15	1 ♂	"	
" "	'79/8/17	7 ♂ 1 ♀	福田 晴男	
" "	'78/8/20	1 6 exs	安東・他	
" "	'80/7/5	1 ♂	福田 春男	
" 2丁目	'79/8/17	1 ♂ 2 ♀	"	
神奈川県川崎市黒川	'71/5/3	2 exs	丸山 清	
" 中野島	'79/9/2	5 ♂ 2 ♀	神部	
" 登戸新町	'68/9/1		本田・浜田	
" 宿河原	'69/4/22		神部	

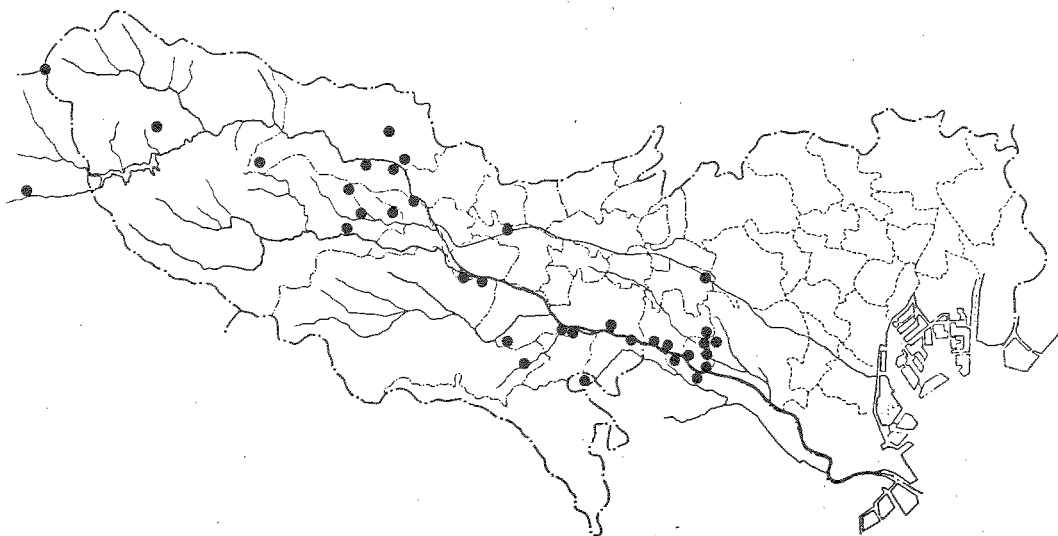


図2 多摩川流域のギンイチモンジセセリの分布

多摩川以外では都内では荒川流域に産地が点在している。埼玉県では荒川流域やその支流の新河岸川、入間川の各所で発生している。神奈川県では多摩川以外に鶴見川から知られ、東京都の町田市へと続いている。山梨県では東京都に近い産地としては笛吹川上流の秩父山地に産地が知られる。

3. 台風による生息地の環境変化と発生に対する影響

1982年には8月1日に台風10号が上陸して340mmの雨を降らせ、9月12日には台風18号と計2つの台風が上陸した。

この2つの台風による影響を調べるために、台風10号については8月11日に調査を行った。もっと早く調査したかったのだが、私自身山梨県に行っていて中央線と中央高速道共に土砂崩れで不通になってしまい、心ならずもこのような日になってしまった。

調査の結果は、生息地のススキは土手の斜面を除いてすべて冠水したようで、発生の中心部付近は枯れたアシの茎などが厚く堆積しており、その厚さは30cm程もあった。また、付近の木にからまった堆積物の様子から見て水位は1m位の高さがあったと思われる。(写真2)

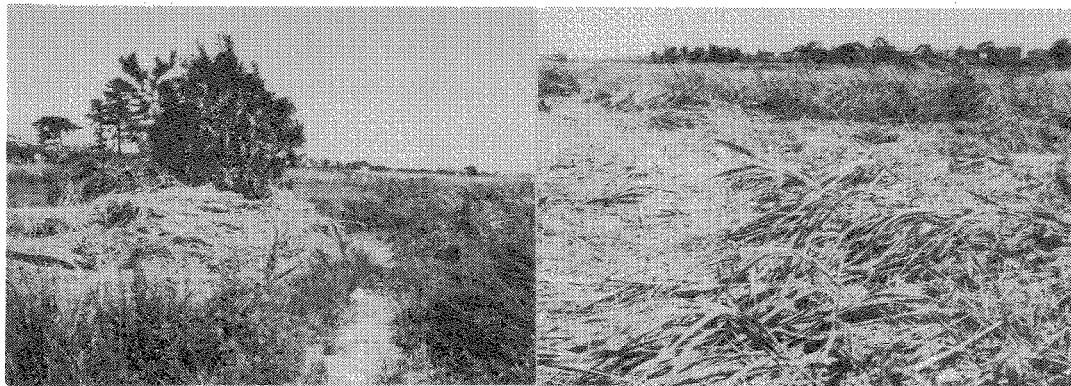


写真2 1982年8月11日
台風による増水で木の根元にひっかかったアシ、川岸から150m離れている

アシの枯れた茎などのゴミに埋ったススキ

この日は残ったススキなどを調べたが一頭の幼虫も見付けられなかった。また晴天にもかかわらず他の蝶も一頭も見かけなかった。

8月25日の調査では冠水しなかった土手の近くで1♂を確認、9月3日の調査では8♂2♀を確認、この内、6♂2♀は冠水の影響をあまり受けていないと思われる土手の付近で、産卵、飛翔していたもので、本来の発生地である河原では2♂を確認したのみであった。また河原にいた1♂は写真撮影のために近よると飛び立ってススキ群落より1m位離れた砂地にとまったが、しばらくして飛び立つとススキ群落に戻った。その後も2、3度同様の事を繰り返したが、その都度ススキ群落を1m位離れるとUターンするという事を繰り返し、遠く飛び去るという事はなかった。

9月12日には台風18号が上陸し、翌13日に調査したところ、河原の冠水はたいした事はなかったが河原が削られて発生地の様子が一変していた。これが台風18号によるものか、10号の時にも削られていたのかは前回の調査の時は注意していなかったので良く分からないが、河原の幅がひどい所では半分位になってしまっている(写真3)。国土地理院の2万5千分の1の地図から過去20年位の河原の

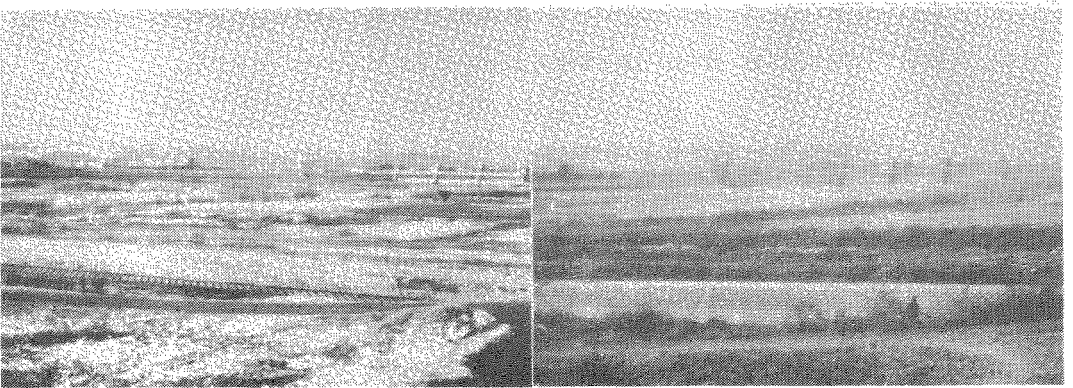


写真3 1979年1月14日中央付近に横一列に見えるのがススキ。ここで発生している。

1982年9月13日 2度の台風で河原が大幅に削られてしまった。

変化をみると図3のようになり、少なくとも東京都側に関しては河原の面積は縮少しているようである。ただ、今回削られた部分のすぐ近くにはコンクリート製のブロックで堤防が作られており、これが作られた時点では河原はここまでしかなかったとも考えられるので、一時河原の幅が広くなりその後また縮少したという事になる。その後も10月17日と10月30日とに主に冠水した部分を中心に調査したが幼虫を発見できなかった。そこで12月5日にさらに広範囲を調査したところ、まず冠水した部分のススキより1幼虫を見付け出し、次には土手のすぐ下に作られていて冠水していない畑の縁に生えているススキの小株から5幼虫、土手の反対側すなわち多摩川住宅前の道路横のススキより1幼虫を見付け出す事ができた。

今回の観察から台風などで生息地が冠水した場合、本種の様な草本を食草とする種はかなりの被害を

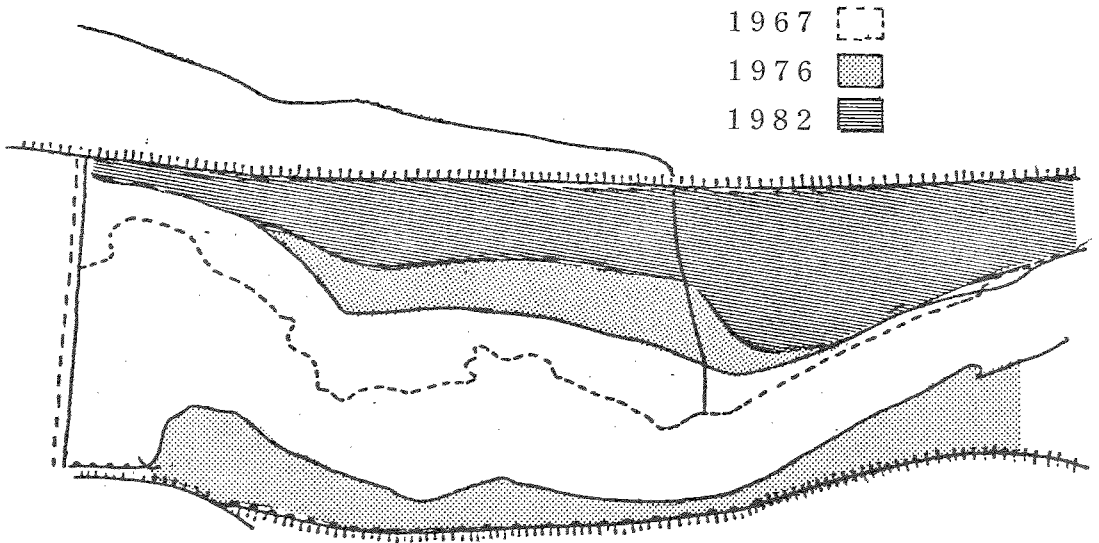


図3 河原の変化

受ける事が判明した。そして、その後の回復は被害を受けなかった部分の少数の個体によって行われるようであるが、成虫はススキ群落のない所にはあまり移動しないようで、被害を受けた場所に姿が見られるのは今回の場合には翌年の春になると思われる。

4. 火入れと生息に対する影響

1982年は例年より気温が少し高いようなので発生を確認するために4月18日に調査に出かけると、それまで発生の中心だった部分がほぼ $100m \times 50m$ 位の範囲にわたって火入れが行われて、越冬幼虫がいる地上のススキの枯れ葉がほとんど燃えて地肌が見えている状態であった(図4・写真4)。そこ

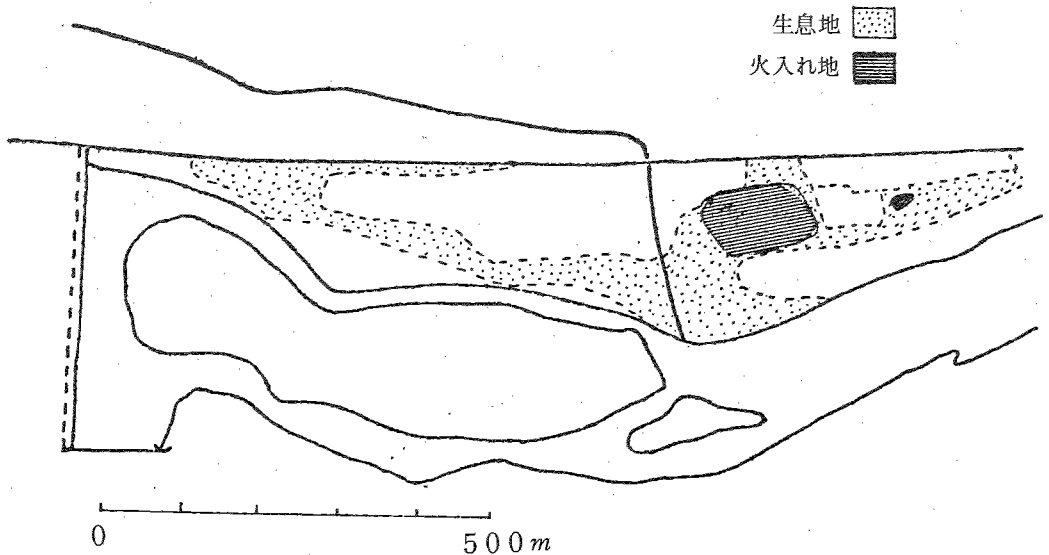


図4 生息地と火入れ地



写真4 火入れ地(右)と自然地(左)の境
火入れ地では、越冬幼虫のいるススキが焼けて地肌が見えている。

表2 火入れ地と自然地の成虫の個体数

時間	火入れ地	自然地
10:00	0	5♂
10:30	0	9♂
11:00	0	9♂
11:30	0	9♂
12:00	0	10♂

は2頭の3令幼虫を確認出来たのみであった。この2頭の幼虫は自然地から15m程火入れ地に入った所で、2頭の間の距離は1m位で同一母蝶によって産卵されたものと思われた。このことから雌個体も雄個体同様あまり広い範囲を飛び回るといった傾向は少ないように思われる。自然地では計11頭確認したが、やはりまとまって見付かる傾向が認められた。

この時のススキの状態は自然地では1.5m位に伸びたものが多かったが、火入れ地では1m程の物が多かった。7月上旬の2化の発生の頃にはかえってこの火入れ地のススキの方が産卵や幼虫の生育に適した若芽が多くて生息には好都合のように思われた。そこで、2化成虫の行動を観察するために7月18日に再度調査を行ったが、この時には火入れ地のススキはすでに背丈以上に伸びて密生しており中に入って調査しても広い範囲を見る事は不可能で、結局群落内では一頭の成虫や幼虫も見られなかったが、ススキ群落を出て土手の上から観察してみると何頭かの成虫がこのススキ群落の中から出て来ては土手にある花で吸蜜したり、土手に生えているイネ科植物に産卵したりした後、再びススキ群落の中に入って行くのを観察する事が出来、特に自然地と火入れ地との行動の相違を認める事は出来なかった。

で、発生の初期ではあったが、火入れの発生に対する影響をみるために次のような調査を行った。

火入れ地とそれに隣接する火入れの行われていない部分(以下自然地)をそれぞれ同時に、ほぼ100m程の距離を30分毎に10分~15分かけてゆっくり往復し、その間に見られたギンイチモンジセセリの数をカウントしてみた。その結果は表2のようになり、火入れ地では10時~12時15分までの5回の調査の間に1頭も見られなかったのに対し、自然地では延べ42頭が認められた。

また、この時の調査で雄個体は自然地から火入れ地や小石のむき出しになった河原に飛んできた時には、1m位飛翔するとすぐにUターンしてもとのススキの生えた自然地に戻る個体が多かった。この時は発生の初期であったために雄のみしか確認出来なかったので6月6日に幼虫の観察を行った。この時は4月18日と同じルート of 左右1mの範囲にある幼虫の巣を数えるという方法をとった。その結果は火入れ地で

以上の事から、火入れ地はその面積が生息地の一部であるならば発生に重大な影響を及ぼす事はないと思われる。逆にクズ、ブタクサといったような植物の繁茂を妨げ、ススキ群落を長く維持するのに役立ち、ギンイチモンジセセリの生息に有利にはたっているものと思われる。同様な意味で定期的な草刈りや前述の台風による出水なども、長い目で見れば発生にはプラス要因になると思われる。

1982年はこのように春から夏にかけては火入れ、夏から秋にかけては台風、さらに冬には唯一被害を受けていなかった土手の部分のススキが刈り取られるという、ギンイチモンジセセリにとっては試練の年であり翌年の発生が懸念されたが、1983年の4月には前年とほとんど変わらない発生数であった。ただ、1984年になるとブタクサなどの植物が繁茂し始め、発生に好適な範囲が狭くなってきているので、そちらの方の影響がどのようになるのかを今後みていきたいと思う。

5. 周年経過

筆者が調査地で調べた発生回数は年3化であった。すなわち、第1化は4月中旬から発生を始め5月中旬まで見られる。第2化は6月下旬から、多くは7月上旬から発生し始め7月下旬まで、第3化は8月下旬から発生を始め9月中旬まで生き残る。(図5)。

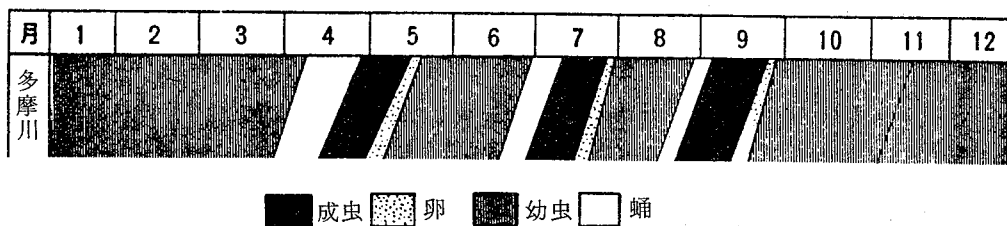


図5 周年経過

このうち3化成虫がどの世代からのものかについては、原(1978)や中西(1980)らによって単純に2化世代からのものとする事に疑問が出されたが、筆者も手元のデータによって次のように推定する。

野外で幼虫を観察すると幼虫の発育にはばらつきが見られ、1984年7月11日に観察したところでは5頭の終令幼虫が見られまだ摂食していたが、その傍らではすでに2♂2♀が見られそのうち1♀は産卵していた。このような違いはその後の発生回数に大きく影響し、早く産卵された系統はその年のうちに3化まで世代を繰り返すが、遅く産卵された系統は2化に止まると思われる。

例えば1979年の観察では9月15日に観察した時には3化の雄成虫がまだ見られたが、同時に表3のように各令の幼虫も観察された。

これらの幼虫のすべてが3化成虫によって産

表3 1979年9月15日採集の幼虫の頭幅

令数	2	3	4	5
頭幅	1.30	1.55	1.85	2.15
	1.20	1.50	1.90	
		1.53		

*単位 mm / ギス使用

卵された世代と考えるのは成虫が8月下旬から発生する事を考えると少し無理があり、2化成虫によって産卵された2化幼虫が混じっていると考えられる。

これらの幼虫はその後すべて越冬幼虫となり蛹化する事はない。ただ一例、大島良美氏から屋外で飼育中のものが蛹化した旨お聞きしたことがあるが、まだ発表されていないようなので詳細は控えたいと思う。

6. 季節型

ギンイチモンジセセリはその名のとおり後翅裏面に一条の銀条紋があるが、この銀条紋は季節によって出方に違いがある。どの地方でも1化のものは銀条紋が鮮明で、2化、3化が出る場合にはこれが不鮮明になり、地色との区別がしにくくなる。この銀条紋の発現がどのような要因によって決定されているのか現在のところ報告されたものはない。

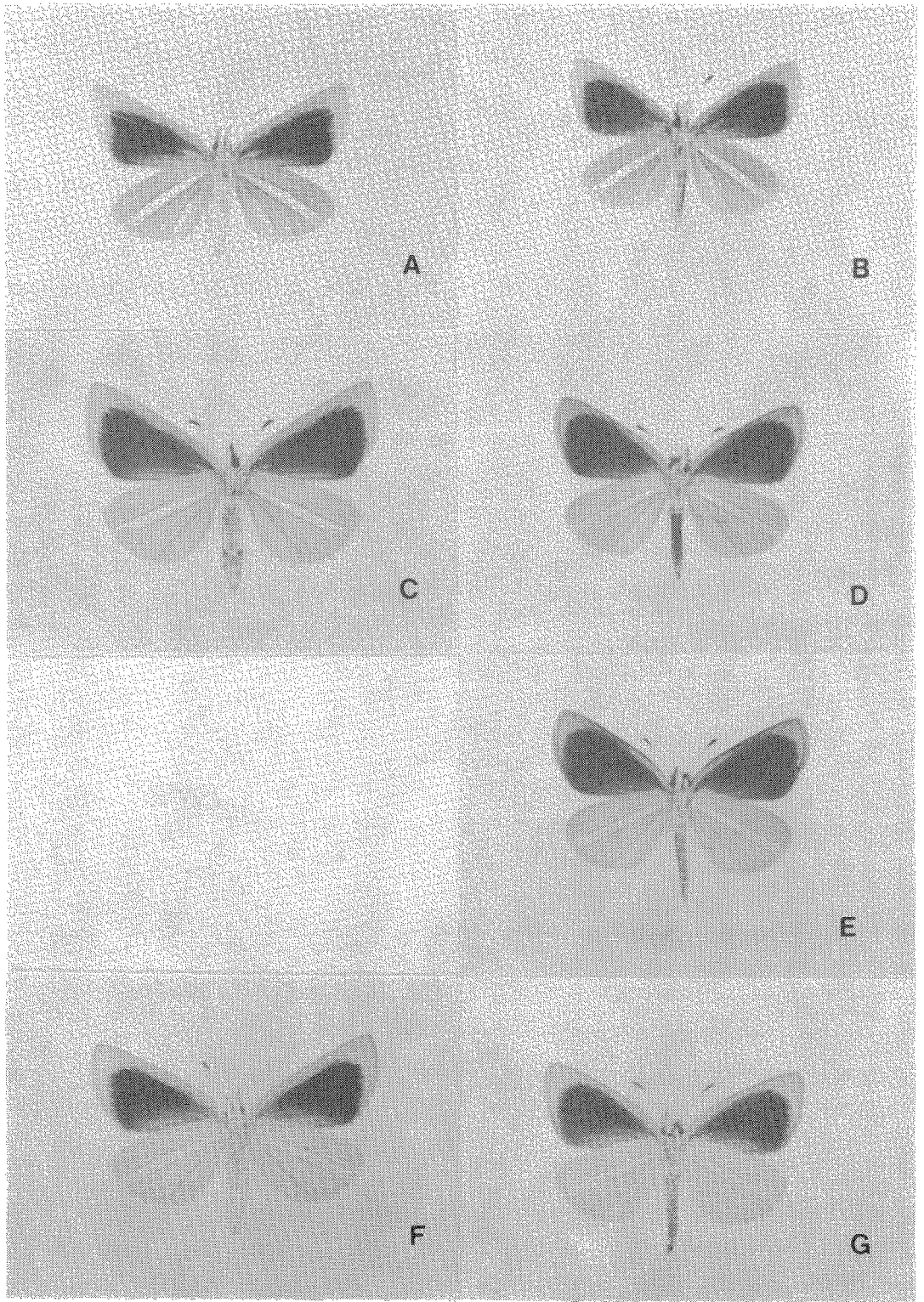
写真5は調査地で1979年から1982年まで、各発生期ごとに撮影した雄の裏面の写真であるが、これを見ても2化、3化のものでも年によって銀条紋の発現の程度に差がある事がわかる。1979年は2化、3化とも銀条紋がはっきりせず典型的な夏型である。1981年は撮影していないので不明であるが、1982年の2化ははっきりして春型に近く、3化ではあまりはっきりしていない。

筆者は採集はしていないので調査地でのギンイチモンジセセリの標本はないが、世田谷区成城産と同区喜多見産（多摩川支流の野川流域のもので、筆者の調査地より少し下流になる。）の標本を見る事が出来たので写真6に示す。1979年のものと1980年のものしか見る事が出来なかったが、ほぼ同様の傾向が認められた。

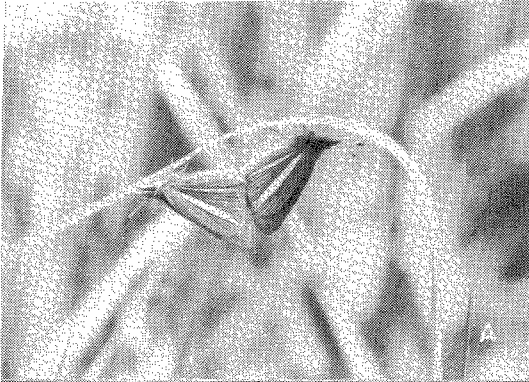
一般に季節型は、主に幼虫、蛹時代の日長によって決定され、温度も関係する事が知られている。ギンイチモンジセセリの場合、野外の同一場所での観察であるから日長は各年とも同一である。したがって、この銀条紋の発現の相違は日長条件ではなく、温度条件の違いによるものと考えられる。そこで1979年から1982年の各5月から8月までの、旬別平均気温（新聞の最高、最低気温より計算した。したがって調査地のものとは多少異なる）を調べてみたのを図6に示す。この図からも幼虫期の後半から蛹期に低温が続いた年に銀条紋がはっきり出る傾向がある事がわかる。

このように季節型が、日長でなく主に温度によって決定されるものには、他にアメリカモンシロチョウ、オオアメリカモンキチョウ、エゾスジグロシロチョウなどが知られている。エゾスジグロシロチョウの場合は、Shapiro (1976・1978)によると短日下では休眠蛹を生じ、それからは春型が羽化する。一方、長日下では非休眠蛹を生じ、それから羽化する成虫は夏型である。しかし非休眠蛹を低温で処理すると春型を生じる。しかもこの低温処理の「感受期」は孵化後1日以内のごく短時間で、個体によってかなりのばらつきがあるという。またLorković (1929)によるとモンシロチョウでは休眠蛹を3ヶ月間低温処理した後、6日～8日間高温（32℃）におくと夏型が羽化するという。

ギンイチモンジセセリの場合、どの時期に感受性があるのか、また温度による発現程度の差なども実



<写真5> A♂・B♀：1981年4月29日，調布市染地3丁目，C♀・D♂：1980年7月5日，世田谷区成城4丁目，E♂：1980年9月2日，世田谷区成城4丁目，F♀・G♂：1979年8月17日，世田谷区喜多見，
 （A，B田中和良採集，C～G福田晴男採集）



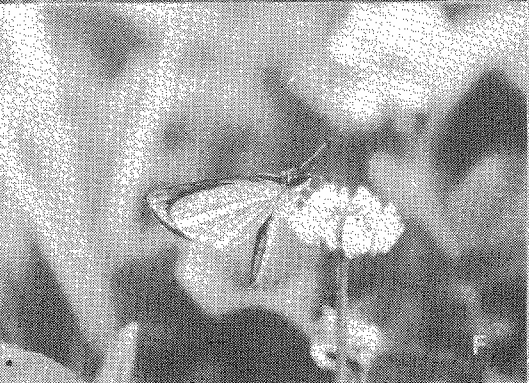
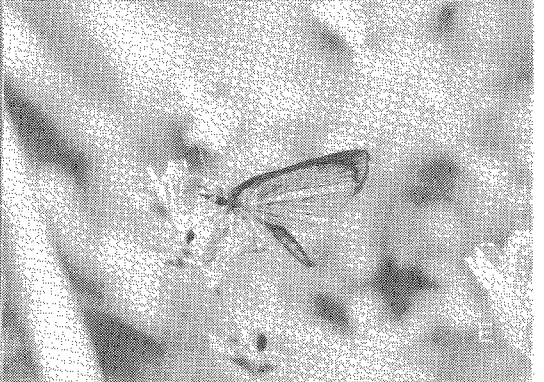
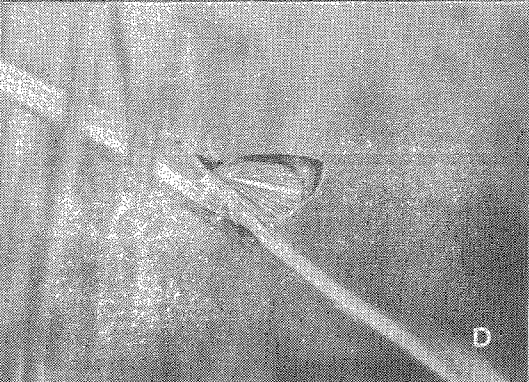
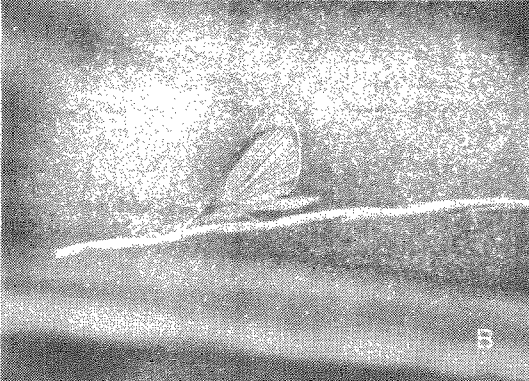
<写真6>

A:1981年5月 3日,

B:1979年7月 9日, C:1979年9月15日

D:1980年6月30日, E:1980年9月 7日

F:1982年7月18日, G:1982年9月 3日



験によって確かめる必要があると思われる。

7. 幼虫の日周行動

幼虫の日周行動については24時間常時観察するのが困難なためか、他の種についてもあまり報告はないようであるが(オオムラサキで糞の数を自動的に記録する事によって調査した例などがある。), 筆者は35mm一眼レフに100mmマクロレンズとストロボ, インターバルタイマーをセットし, 20分毎に自動撮影を行ない24時間撮影したフィルムを現像し, ネガフィルムをルーペで観察して幼虫の行動(摂食行動)を観察・記録したが, 摂食中の幼虫が写っていない場合でも食痕がそれより前に撮影したフィルムの形と異なっていれば, その時間に摂食したものとして記録した。(図7・写真7)

1984年6月19日と1984年7月1日に調査地の調布市染地3丁目付近の多摩川河川敷から幼虫を採集し, 自宅のベランダに置いた鉢植のススキに移してから2日~5日して巢内でおちついて摂食しているのを確認してから観察した。観察中の天候は6月21日は夜間雨が降ったがその他は晴天であった。ベランダは南向きで日当たりと風通しは良好だが, 日中は半透明のスレート屋根がある関係で直射日光はあたらず, 雨がかかる事もない。

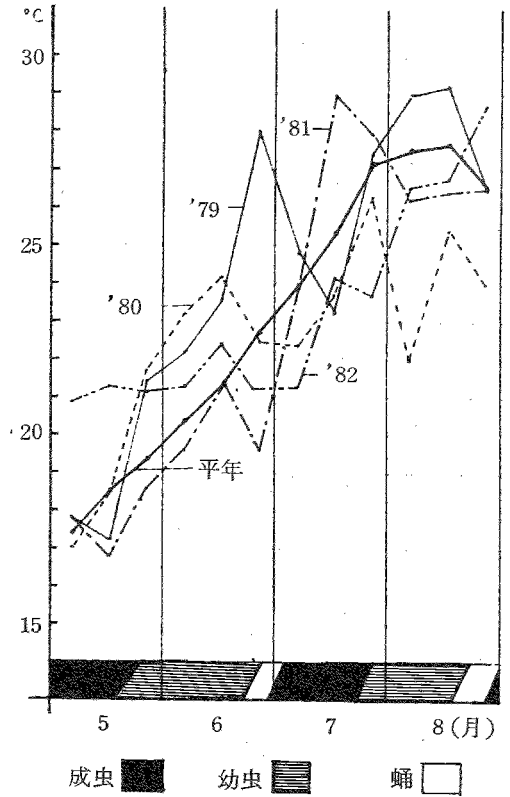


図6 東京都の旬別平均気温

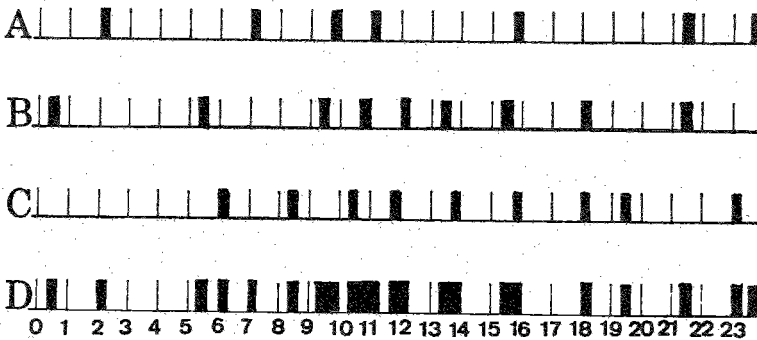


図7 幼虫の日周行動

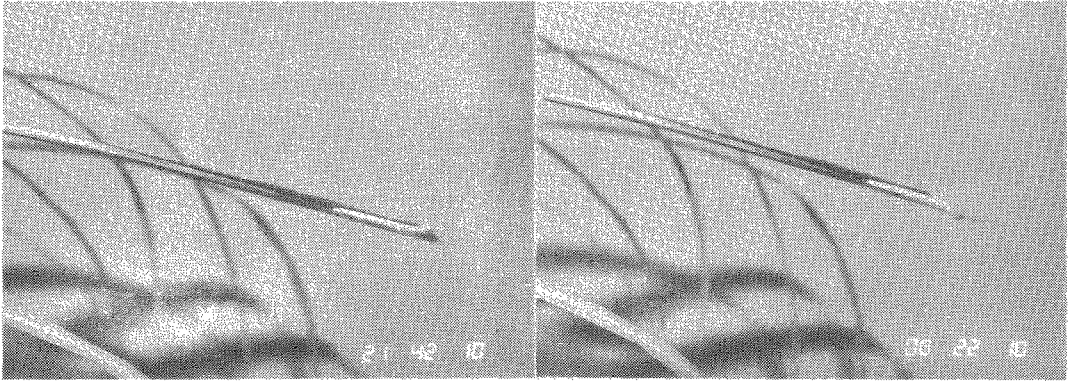


写真7 幼虫の日周行動
1983年6月24日 B幼虫 前回摂食したのとは反対側の葉を食べる。

観察した個体中C個体は1983年6月19日に採集し、6月21日～22日に観察したが翌23日の夜には摂食をやめ、24日には巣を離れて別の場所で前蛹になった。A個体は1984年7月1日に採集したもので7月3日～4日にかけて観察した。B個体は1983年6月19日に採集したもので6月24日～25日にかけて観察した。なお、図7のDはA・B・C、3個体の行動を重ね合わせて示したものである。調査の結果は図7からも分かるように、主に摂食するのは午前10時～15時にかけてで、その他に早朝6時前後と夕方6時～夜12時の間に間隔を置いて散発的に摂食するようである。

摂食を始める位置は、前回摂食したのとは反対側の葉縁から行われ、個体によっては葉の先端部を摂食していたものが次の摂食の時には葉柄側を摂食するものも見られた。

一回の摂食時間は20分以内で、続けて摂食する場合でも摂食後次に摂食するまでには一時間以上間隔を置くようである。

8. 吸 蜜

これまでに調査地で吸蜜を確認した植物は表4に示すように19種になる。黄色・白色・淡赤色といったような淡い色を好むようで、近くの人家の園芸品種に訪れているのは観察していない。

4月から5月にかけては花の種類も多く、種々の花で吸蜜するが、その中ではセイヨウタンポポとハルジオンの2種が量的にも多く、また好んで吸蜜に訪れるようである。この時期カラスノエンドウが多量に繁茂し、花も多数つけているが、吸蜜を確認したのは1979年4月29日の1回のみである。この花は吸蜜が少ないのか、他の蝶もあまり吸蜜には訪れていないようである。

7月の2化成虫の頃には花の種類も数も少なくなるが、中心的なものとしてはシロツメクサがあげられる。この花は花期も長く蜜量も多い様で、この時期の重要な吸蜜源となっている。

8月末から9月の3化成虫の時期には、主としてヤブマメから吸蜜しているのを観察した。この時期には他にキク科の植物が吸蜜源として重要なようである。例年9月上旬に土手の斜面にかなりの量のツ

ルボが咲き、ベニシジミやイチモンジセセリが吸蜜に訪れているが、ギンイチモンジセセリの吸蜜を観察したのは1981年9月5日の1回だけである。

＜表 4 吸蜜植物＞

植 物 名	観 察 年 月 日	花 色
ハルジオン	5月	白
ヒメジオン	4～5月・9月	
セイヨウタンポポ	4～5月・9月	黄
ヘビイチゴ	1981年 5月11日	
オヘビイチゴ	1981年 4月29日	
アメリカフウロ	1980年 5月11日	淡紫赤
カラスノエンドウ	1979年 4月29日	
キウリグサ	1981年 4月29日	青
オオイヌノフグリ	1981年 4月23日	
シロツメクサ	各発生期	白
ヤブジラミ	1979年 7月 9日	
カワラニガナ	1982年 7月18日	黄
ホウキギク	1979年 9月15日	白
ニラ	9月	
メドハギ	1979年 9月15日	
ハキダメギク	1982年 9月 3日	
ツルボ	1981年 9月 5日	
ヤブマメ	9月	淡紫赤
マルバヤハズソウ	1980年 9月 7日	

※特定の日付のないものは毎年見られることを示す。

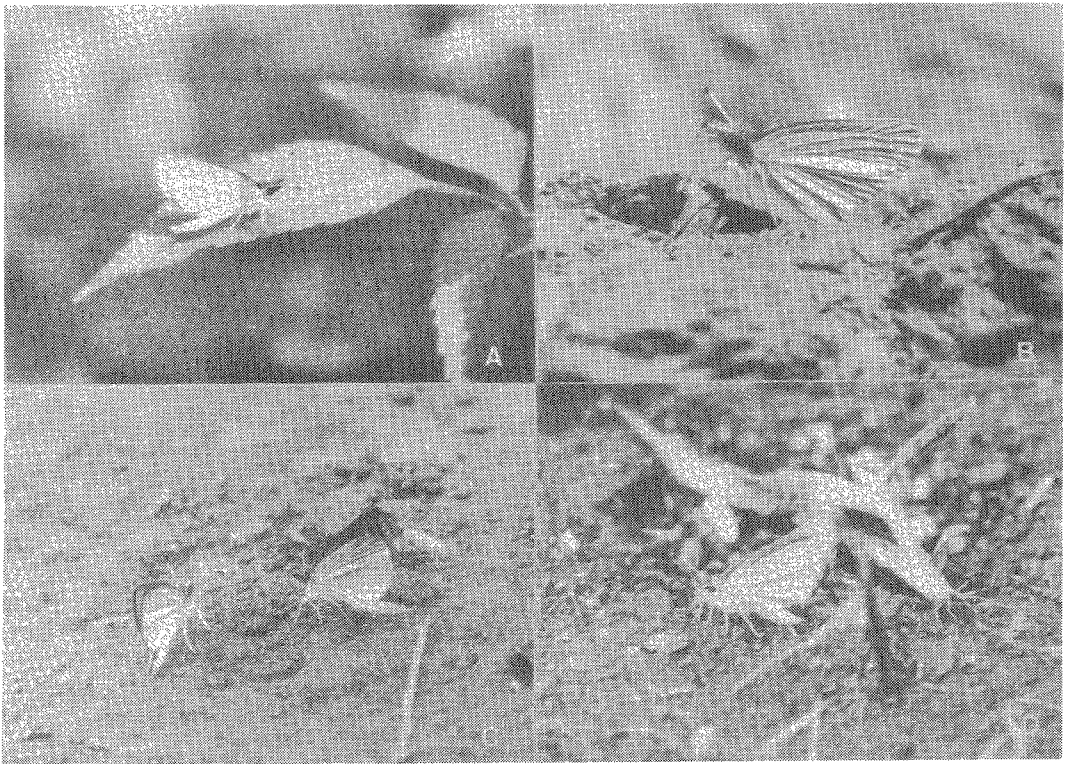
9. 吸排水行為

この観察地は河原のためか、砂地で水はけの良い所が多く、吸水及び排水行為の観察には不適當と思われるが、以下の5例について観察している。

- 1) 1976年9月1日 18排水行為
- 2) 1981年4月29日 12時頃 快晴 18吸水

- 3) 1981年5月3日 12時頃 快晴 2♂吸水
- 4) 1981年9月15日 11時14分 晴れ 1♂吸水及び排水
- 5) 1982年7月18日 11時～12時30分 晴れ 5♂1♀吸水

この内 2)と3)の2例については吸水を観察したのは同一の場所で、観察地内では例外的に水はけが悪く、6㎡位の水溜りがあり、そこにアシの枯れた茎などが倒れて腐敗しているが、この腐敗したアシの茎にとまって吸水していた(写真8-B)。泥地から直接吸水するのは観察出来なかった。また、排水行為も見られなかった。



<写真8> ギンイチモンジセセリの吸水

- A 1976年9月1日
- B 1981年4月29日
- C 1982年7月18日
- D 1982年7月18日 雌の吸水

5)の例では前日の雨で砂が少し湿った様な状態になっており、そのような場所で、多くは単独で吸水していたが、中には写真8-Cに示す様に2頭が並んで吸水している事もあった。しかし特に集合性のようなものは認められなかった。またこの時は気が付かなかったか、その時撮影したフィルムの中に

雌と思われる個体が吸水しているものがあり、九州大学の白水先生に写真を送って確認していただいたところ、ほぼ雌に間違いのないとの御返事であった（写真8-D）。この時は注意して見ていたが、排水行為は確認する事は出来なかった。4)では当日の11時14分に土手の下の道を歩いていたところ、前日の雨で出来た水溜りで吸水していた1♂が飛び立ち、3m位離れた葉上に静止した。すぐ撮影のために近づくと後翅の間から腹部を下に出して水を一滴排出した。その後は水滴を排出せず、11時17分腹部を上げて後翅の間に戻した。この時は吸水中に驚かして飛び立たせてしまったので、吸排水行為をしていたのか、それとも吸水後別のところで排水するのかわかり不明である。

後者の例ではないかと思われるのが、1)の例である（写真8-A）。これは吸水している所は未確認であるが、葉上に静止したのを見て撮影のため近づいたところ、葉上に一滴排水したもので、しばらくそのまま静止していたが、特に吸い戻すような行為もせずに飛び立った。

なお、図鑑などでは排抽物などでも吸汁するとの事であるが、筆者は現在までのところ観察していない。

10. 蛹 化

本種の蛹化については、2化幼虫についてチガヤの地表から数cmの高さに蛹化していた例（中西、1977）や地表から30cmのアシ・ススキに蛹化していた例（遠藤、1983）などが知られているが、筆者は1984年9月17日に調査地において地上から1.5m位の高さのススキの葉の先端に蛹化した例を観察している。

これは、食痕のある葉を折り曲げて葉柄部の方に頭部を向けて蛹化していた物で、脱皮殻であったために帯糸その他の細部については不明である。

また、幼虫を鉢植のススキで飼育した場合には移動後蛹化するものと、幼虫時代の葉を利用してそのまま蛹化するものがあった。

11. おわりに

以上ギンイチモンジセセリの分布と生態について、筆者の知り得た事をまとめて見たが、この他にも配偶行動、産卵行動その他重要な生態があるが、それらについては今後観察の機会を増やして後日発表したいと思う。

本研究を行うにあたり、「とうきゅう環境浄化財団」には種々の御援助をいただいた。また、九州大学の白水先生にはアドバイスをいただくと共に文献の面で色々お世話になり、世田谷昆虫愛好会の福田晴男氏には貴重な標本をお借りする事が出来た。大島良美、浜栄一、美ノ谷憲久の各氏からは有益な御助言をいただいた。この場を借りて御礼申し上げたい。

参 考 文 献

1. 伊藤 正宏・原 聖樹・山内 達也・落合 弘典：1981：神奈川県の蝶類：神奈川県昆虫調査報告書：神奈川県教育委員会
2. 市川 和夫・原 聖樹：1978：埼玉県の蝶類：埼玉県動物誌：埼玉県教育委員会
3. 岩野 秀俊：1981：府中市是政の蝶：LEPTALINA(26)：108
4. 岩波 栄一・美ノ谷 憲久：1984：町田市鶴見川流域のギンイチモンジセセリについて：LEPTALINA(61)：261-262
5. 江島 正郎：1977：チョウ類の吸水行為(1)：昆虫と自然12(6)：11-14
6. 遠藤 茂：1983：セセリチョウの蛹ノート(3)：多摩虫(7)15：11-12
7. 環境庁：1980：日本の重要な昆虫類—南関東版—：68
8. 木村 正明：1981：1980年世田谷区成城の蝶：LEPTALINA(29)：117-119
9. 久保田 繁男：1982：青梅市の蝶類分布：青梅市の自然II：495-534：青梅市教育委員会
10. 倉地 正：1983：羽村の蝶の発生時期：うすばしろ(8)：9-13
11. 鹿野 衡：1979：野猿峠付近の蝶：多摩虫3(7)：10
12. 渋谷 誠：1974：じゃのめ蝶のいる町—河崎の蝶 1974年度の調査報告—神奈川県虫報(45)：1-27
13. 白水 隆：1958：日本産蝶類分布表：北隆館：東京
14. 白水 隆・原 章：1960：原色日本蝶類幼虫大図鑑：保育社：大阪
15. 信州昆虫学会：1971：信濃の蝶—セセリチョウ科—：信州昆虫学会
16. 須田 孫七：1982：青梅市の昆虫：青梅市の自然II：141-493：青梅市教育委員会
17. 須走 重康：1981：小菅村での蝶数種の採集記録：うすばしろ(3)：14
18. 世田谷昆虫愛好会：1979：第8回調査会報告：LEPTALINA(13)：56
19. 世田谷昆虫愛好会：1983：附・文献資料(3)—蟲の世界(第1巻1号~第4巻11・12号)—：LEPTALINA 合冊本巻3：資8
20. 清 邦彦：1976：富士山周辺のギンイチモンジセセリ：駿河の昆虫(94)：2741-2760
21. ————：1984：静岡県および山梨県における河川敷・堤防・海岸の蝶覚え書き(3)：駿河の昆虫(125)：3633-3646
22. 田中 和良：1981：調布市多摩川流域におけるギンイチモンジセセリの生態について：日本大学豊山中・高等学校紀要：65-82
23. ————：1983：多摩川におけるギンイチモンジセセリの分布と生態(I)：LEPTALINA(46)：185-187
24. ————：1983：多摩川におけるギンイチモンジセセリの分布と生態(II)：LEPTALINA(52)

:213-217

25. -----: 1984: 多摩川におけるギンイチモンジセセリの分布と生態(III): LEPTALINA(56)
:237-240
26. 中西 元男: 1977: 三重の蝶—ひらくら1~20巻(1957-76)既報の整理(I): ひらくら
21(2):13-17
27. 仲野 善敏: 1977: イチモンジセセリの pumping の一観察記録: 昆虫と自然12(13):16
28. 仲山 順一郎: 1967: <昆虫採集地案内> 奥多摩—蝶を中心に: 昆虫と自然2(7・8):12
29. 橋爪 寛: 1979: 第8会調査報告: LEPTALINA(13):56
30. 福田 晴男: 1978: 世田谷の蝶1977年度の記録(1): LEPTALINA(6):25-26
31. -----: 1979: 野川の蝶リスト: LEPTALINA(9):37-38
32. -----: 1979: 世田谷のギンイチモンジセセリ: LEPTALINA(14):57-58
33. -----: 1980: 世田谷の蝶1979年度の記録: LEPTALINA(18):73-76
34. -----: 1981: 世田谷の蝶1980年度の記録: LEPTALINA(25):101~104
35. -----: 1982: <多摩丘陵調査2> 多摩市の蝶: LEPTALINA(45):183
36. 福田 晴夫 他: 1972: 原色日本昆虫生態図鑑 III チョウ編: 保育社: 大阪
37. ----- 他: 1984: 原色日本蝶類生態図鑑IV: 保育社: 大阪
38. 藤岡 知夫: 1981: 改定新版日本産蝶類大図鑑: 講談社: 東京
39. 本田 洋・浜田 公: 1968: 多摩川のギンイチモンジセセリ: LEPTALINA(1):1
40. 牧林 功: 1980: 日本産セセリチョウ科の属の分布型と食性について: 昆虫と自然15(6):4-

11

41. 松原 豊: 1980: 1979年度世田谷区野川流域の蝶: LEPTALINA(19):79
42. -----: 1980: 多摩市多摩川河川敷及び百草園の蝶: LEPTALINA(22):89
43. -----: 1982: 多摩市北東部9月の蝶: LEPTALINA(45):183
44. -----: 1983: 玉川上水駅周辺7月の蝶: LEPTALINA(49):204
45. -----: 1984: 多摩川・八高線鉄橋~拝島橋付近の蝶: LEPTALINA(56):240
46. 丸山 清: 1971: 川崎市北部の蝶: 神奈川虫報(37):1-8
47. -----: 1972: 川崎市北部のギンイチモンジセセリの新産地: 神奈川虫報(39):34
48. 宮野 浩二: 1984: 西多摩郡日の出町の蝶: うすばしろ(11):1-10
49. 門馬 義行・小島 豊: 1968: 成城町周辺のゼフィルスとレプタリナ: LEPTALINA(2):5-

7

50. 矢田 脩: 1980: シロチョウ類の季節型の適応的意義: ちょうちょう(3)8:50-52